

蕁麻疹への対処法

門別診療所 三浦耀平

8月も半分が過ぎ、日々暑さも増してきました。サマーセールが近づいて参りましたが、それが終わっても、まだセリの開催は続きます。夏～秋にかけてのせり期間では皮膚病の診療がよく入ります。今回はその中でも蕁麻疹についてお話させて頂こうかと思います。

蕁麻疹とは「指で圧迫すると凹むような発疹が、体全体もしくは局所的に皮膚に現れた状態」の事を言います。(写真1)一言に蕁麻疹といっても、その原因は多岐に渡ります。乾草中のカビや厩舎内の埃、放牧地の牧草や虫といった環境性のものから、抗生剤や鎮静剤といった薬品でなることもあります。今述べたものは発症に至る過程で、免疫の過剰応答(アレルギー反応)が関与していますが、免疫が関与しない日光や気温、圧迫といった物理的な刺激で発症する可能性もあるようです。幸いにも蕁麻疹は痒みによる自傷や脱毛、感染などが起きなければ大きな問題にはならず、特に治療せずとも自然に発疹が引く事が多いです。ですが、自然におさまらない時や、繰り返し発症する馬には何かしらの対策を考える必要があります。



写真1

対処法として原因を取り除くことが理想的ではありますが、特定は簡単ではありません。見ただけからの原因判定は難しく、報告されている様々な検査法でも、多くの候補があがり、どれが一番の要因かが不明瞭になりがちです。よって対策を講じる際は、検査の手間をかけずに試行錯誤されるのが一般的です。例えば、乾草中のカビが疑われる場合は、乾草の種類を変更したり、温水に浸してから給餌してみる等があります。畜舎の埃が疑われる場合は、その馬を風通しの良い馬房に移動させたりしても良いでしょう。中には、放牧地の牧草や虫のように除去の難しい原因が疑われる場合があるかと思われま。それでも今時期、セリへの上場が予定されている馬などについては、出来るだけ早めに発疹を引かせたいものです。このような場合、対症療法として、ステロイド剤や抗ヒスタミン剤(写真2)といった薬が有効です。これらの薬は口から投与できる錠剤タイプの物もあるので獣医を呼ばなくても牧場で対応することが可能です。ただし、用法用量に関する事や呼吸器障害などの蕁麻疹以外のアレルギー症状が出ている場合は、使用前に獣医師に相談する事をお勧めします。服用を止めると蕁麻疹が再発することも多いので、あくまでこれらの薬は応急処置であると認識しておく事が重要です。虫への対策は過去にHBAの先生がよもやま話「馬の虫刺されによる過敏症」でも紹介なされているので、それも参考にして頂けたらと思います。



写真2